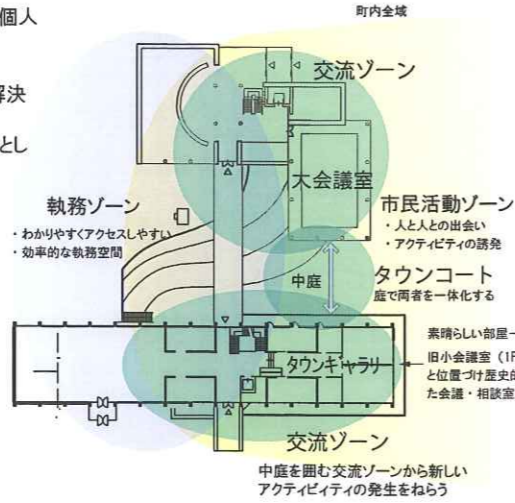
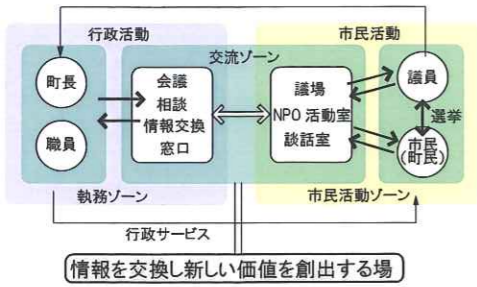


基本となる考え方：庁舎は市民・社会・行政の交流を通して、明日の大多喜を創造する場である。明日の大多喜を議論するためには、過去（旧庁舎）に学び、継承し、発展させることが必要。そして主役である市民が主体となって考えていくことが不可欠である。

1 交流ゾーンの創出—水平協働ネットワーク型社会を担う庁舎をつくる—

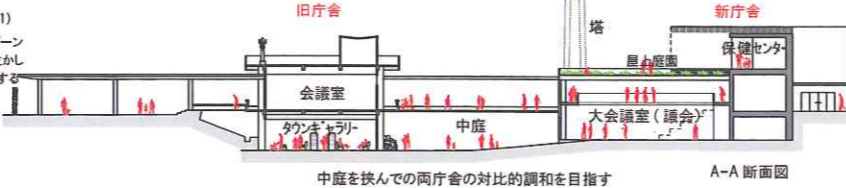
- ・水平協働ネットワーク型社会では、市民がNPO、団体、個人として行政や企業と協働し公共サービスを担う
- ・議会も市民が活動するネットワーク組織の一つである
- ・庁舎は町の課題を行政・議会・市民で共有しどのように解決していくのか考えていく場所となる
- ・三者が情報を交換し、新しい価値を生み出す創造的な場として、また庁舎の基幹施設として交流ゾーンを位置づける



2 旧庁舎との対比と対話 —町の記憶、空間の履歴としての旧庁舎を継承し、発展させる—

旧庁舎は町の記憶を伝えるものであり、またこの空間には人々の活動により形成された履歴がある。オーセンティシティを尊重し、継承するということを基本としつつ、現代的な利用を考えた改修などを行う。

- <旧庁舎>・竣工時の状態に復元することを第一義とする
- ・耐震補強は対象範囲を限定し、外観、内部空間への影響を極力避ける
- ・設備は後補のものを取り除き、省エネルギー、環境との共存、人への優しさをテーマにする。
- <新庁舎>・旧庁舎との関係性に留意しつつも、デザインは独立的に扱う
- ・新庁舎の付加により、旧庁舎の歴史性を際立たせる。



3 設計プロセスへの市民参加—市民の居場所としての庁舎をつくる—

- ・庁舎は行政、議会、市民の共同の活動スペースである
- ・行政、議会に加えて、重要なユーザーである市民（町民）参加のもとで設計を進める
- ・次のテーマでワークショップを行う

ワークショップ1

テーマ 市民の活動場所をつくる

プログラム

- ・交流ゾーンとは
- ・タビキヤリ-のありかた
- ・大会議室の使い方
- ・ポラテアカ1

ワークショップ2

旧庁舎の活用法を考える

- ・旧庁舎の歴史
- ・工法・材料・意匠の研究
- ・近代建築と庁舎

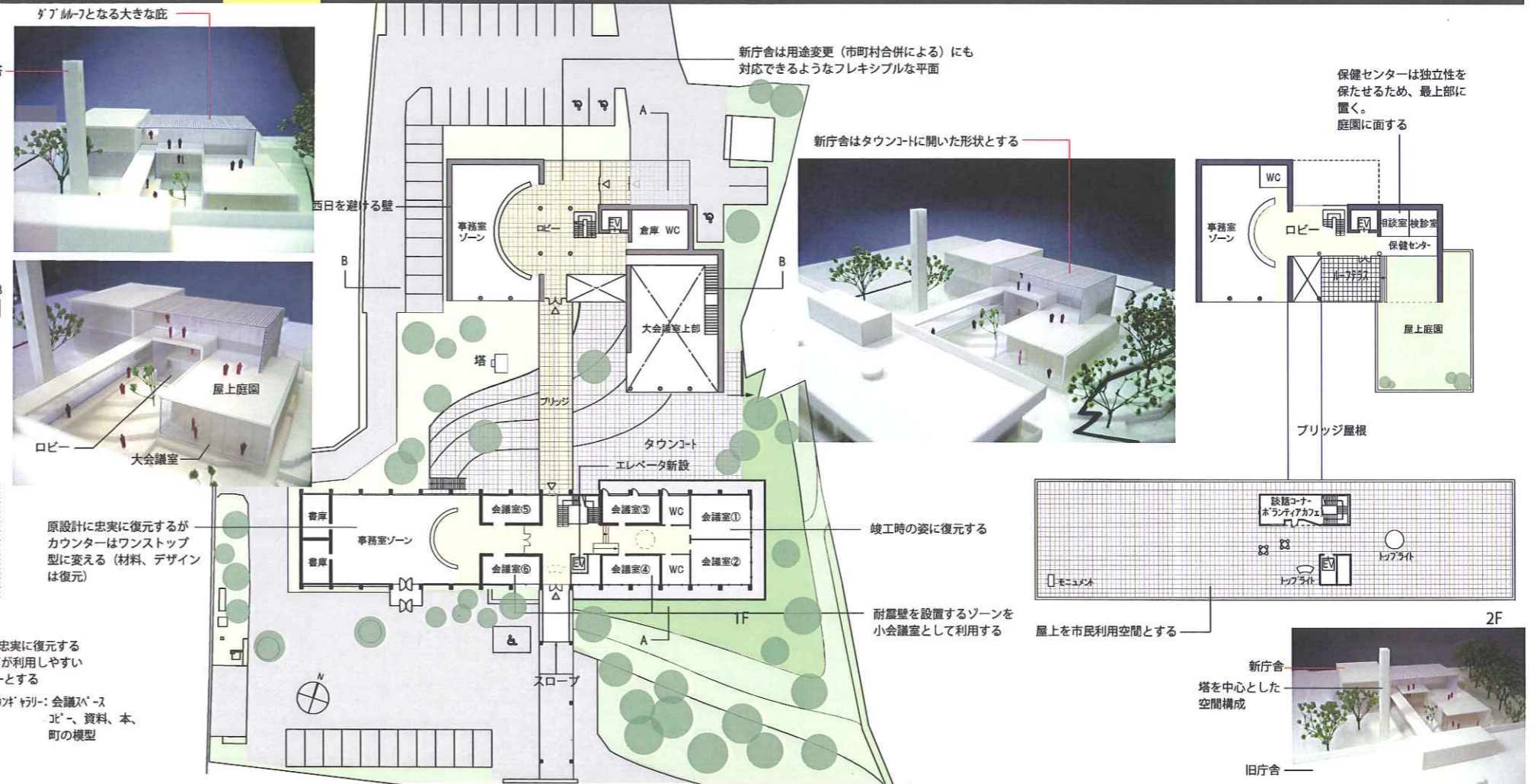
ワークショップ3

行政サービスの効率化を考える

- ・ワンストップサービス
- ・行政サービスへの市民参加
- ・インターネットサービス

配置の考え方：塔、ブリッジを構成の要とし、谷を新しいアクティビティの結節点広場として活用する。

建築の考え方：共用空間（ブリッジ）を背骨とし、丘の上（西）に事務室、谷（東）に交流ゾーンというわかりやすい空間構成をつくる



設備計画：方位や日光の入射角に配慮した旧庁舎に学び、自然のエネルギーや地域資源を活用した人に優しい環境をつくる

構造計画（耐震改修）：オーセンティシティに配慮しつつ、百年の計に立った耐震補強を行う

